

ジオパーク全国大会前に高校生が火山の仕組み学ぶ 上富良野町

09月26日 12時09分



貴重な地形や地質が見られる「ジオパーク」の活用に向けて意見を交わす全国大会が、27日から上富良野町などで開催されるのを前に、地元の高校生が火山の仕組みを学ぶ催しが行われました。

日本ジオパーク全国大会は、各地のジオパークの活用や保全のあり方などについて意見を交わす大会で、27日と28日、上富良野町などで開かれます。

26日は上富良野高校で、地元の高校生およそ110人が参加して、火山の仕組みを学ぶ催しが開かれました。

地元にある活火山、十勝岳では、およそ100年前の1926年に起きた噴火で山頂部に積もった雪がとけ、泥流となって流れ下る「融雪型泥流」が発生し、死者・行方不明者が144人に上るなど、大きな被害が出ました。

催しでは、この融雪型泥流を再現したコーナーが設けられ、高校生たちは火砕流を模して高温で溶かした塩が斜面を流れ下る様子を観察していました。

参加した生徒は「融雪型泥流がどのようにして発生するのか分かってよかったです」と話していました。

十勝岳ジオパーク推進協議会の富島千晴さんは「大会を通じてジオパークの取り組みを知ってもらえる機会にしたい」と話していました。

<https://www3.nhk.or.jp/sapporo-news/20250926/7000079297.html>

